

## 2020 年度事業 進捗報告書（実行団体）

- 提出日 : 2022年10月3日
- 事業名 : ちば子ども若者アフターケアネットワーク
- 資金分配団体 : 公益財団法人ちばのWA地域づくり基金
- 実行団体 : ちば子ども若者アフターケアネットワークコンソーシアム

### ① 実績値

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況 *
ネットワークを活かしたアフターケアに関する連携モデルができている	連携モデルの件数	20 件	2023 年 3 月	2 件 千葉県児童福祉施設協議会職業指導員部会、千葉県中核地域生活支援センター連絡協議会、千葉県社会的養護自立支援事業受託事業所ちばアフターケアネットワークステーション(CANS)を中心とした定例会が隔月開催されるようになった他、県内各児童相談所や児童養護施設への訪問、勉	2

				強会等を開催し徐々に理解が広がりつつある。その中で新たな連携実践も生み出されており、計画通り順調に進んでいる。	
アフターケアに向けた連携に必要な事柄や制度的な課題が明確になっている	発行したリーフレットの種類 発行した報告書の種類	1種 1種	2023年3月	前記同の定例会を通じて毎回、アフターケアに向けた連携に必要な事柄や制度的な課題に関する意見交換、考察がなされており、どのようなリーフレットや報告書を作成していくことが有用であるか具体的なイメージが定まりつつあるため、計画通り進んでいると評価できる。	2
連携モデルが周知されている	連携モデルの件数	30件	2024年1月	0件 ※2023年度実施目標 前記の通り、各機関への訪問や勉強会開催の機会が増えており、関	2

				係機関への周知は順調に進んでいる。	
社会的養護や子ども・若者支援に関する各ネットワークが活動するようになる	ネットワーク数 各ネットワークの会議開催数	10 年6回	2023年3月 2024年1月	9ネットワーク 2回 現在、県内の様々なネットワークへの働きかけを行っているが、その反応はまばらであり、またコロナ対応等の外的要因で活動が制限せざるを得ない状況もある中で、単にネットワークの数や会議の開催数を指標とすることの適切さに疑問が生じている。限られた数、頻度の中でもより有機的な形で連携を促す取組に着目した指標を再考していく必要がある。	4
社会的養護や子ども・若者支援に関する各ネットワークに参加する支援者が増加する	各ネットワークに参加する支援者総数	のべ100人	2024年1月	50人程度 各ネットワークへの働きかけは進んでいるものの、現時点では従前	3

				より子ども若者支援に関心の高い支援者をつなぎあわせることに留まっており、新規層の開拓、拡大にまでは至っていない。	
ネットワーク構築、活用のノウハウについて各ネットワーク間で共有されている	発行した報告書の種類	5種	2024年1月	0種 ※2023年度実施目標 各ネットワーク毎にノウハウが議論されておりその限りでは知見の蓄積、分析は進んでいるが前記の通り、ネットワーク体の活動自体が見込みよりも進んでいない。	3
千葉県内の子ども・若者に関する支援情報や当事者の声が情報発信されている	HP アクセス数 SNS フォロワー数	1000PV/月 1000人	2023年3月 2024年1月	0PV/月 ※サイト未公開 291人 HP、SNSの定期更新やオンラインイベントの開催によりオンライン上での発信活動は進ん	3

				でいる。一方で予定していた情報サイトの開設は遅れているため、担当するWEBチームを組織して対応を検討している。	
子ども・若者が支援に関する会議に参画したり、支援者とともに交流、議論できる仕組みが創出される	各ネットワークの会議に参画するためのコーディネーター数 会議等への子ども・若者の参加者数	5件 30人	2023年3月 2024年1月	0件 0人 支援者のつながりが強化されるのに比して子ども若者の参画については遅々として進んでいない状況にある。関係機関の声からも子ども・若者の参画の意義自体は徐々に浸透してきていることが伺えるが具体的に子ども若者が参画する取組にまでは至っていない。	3

\*進捗状況：1 計画より進んでいる、2 計画どおり進んでいる、3 計画より遅れている、4 その他

## ② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
3.課題がある
2.アウトカムの状況
A：変更項目 <input checked="" type="checkbox"/> 変更なし <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値
5.新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
オンラインツールを活用したイベント開催や居場所活動の実施や新型コロナウイルス感染拡大による予定変更も想定して予め複数経路で並行して活動を実施するなどした。

## ③ 広報（※任意）

- 1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）
- 2.広報制作物等
- 3.報告書等

## 2020 年度事業 中間評価報告書（実行団体）

### 評価実施体制

内部／外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	インタビュー、アンケートの実施及び分析、報告書作成	安井飛鳥	ちば子ども若者ネットワーク
内部	インタビュー、アンケートの実施及び分析、報告書作成、関係団体との連絡調整	佐藤真紀	ちば子ども若者ネットワーク
内部	インタビュー、アンケートの実施及び分析、関係団体との連絡調整	澁澤茂	千葉県中核地域生活支援センター協議会 代表
内部	インタビュー、アンケートの実施及び分析分析、関係団体との連絡調整	池口豊	千葉県児童福祉施設協議会職業指導員部 会 部会長
外部	インタビュー、アンケートの分析、事業内容についての客観的評価	田北雅裕	一般社団法人福祉とデザイン
外部	インタビュー、アンケートの分析、事業内容についての客観的評価	宮本みち子	個人

A) 事業のアウトカムの進捗状況の評価

① 短期アウトカムの進捗状況

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
<p>職業指導員部会や中核地域生活支援センター、ちばアフターケアネットワークステーション、児童相談所等を中心に、措置解除後も地域で継続的にアフターケアが行われる体制になっている</p>	<p>自治体、児相等公的機関の数 施設、中核、NPO 等支援機関の数</p>	<p>公的機関 10 機関 支援機関 30 機関</p>	<p>2024 年 1 月</p>	<p>公的機関 8 機関 支援機関 32 機関</p> <p>関係団体による定例会を 2 ヶ月に 1 回の頻度で定期開催を始め、より良い連携体制を目指した協議を重ねている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉県児童福祉施設協議会職業指導員部会（13 施設） 先駆的な取組をしている神奈川県の訪問、意見交換会を実施たことで、自施設や自地域でも同様の取組を改善させようとする提案が複数出る等、活動が活気づき始めている。</li> <li>・千葉県中核地域生活支援センター連絡協議会(13事業所) 各施設や児童相談所と連携した支援モデル事業の取組を始め、現在各自地域の児童相談所への訪問、勉強会を実施している。</li> <li>・ちばアフターケアネットワークステーション 各施設や児童相談所を対象に 18 歳成人や自立支援に関するセミナーを実施し、各施設や児童相談所、その他支援機関とのハブとしての機能を果たしている。</li> </ul>



<p>社会的養護や子ども・若者支援に関する各ネットワーク（①領域別②地域別③テーマ別）が継続的に活動している</p>	<p>会議開催頻度 支援件数</p>	<p>年間スケジュールが決まっている 60件</p>	<p>2024年1月</p>	<p>年間スケジュールが明確には決まっていない。 件数測定不能（何を持って本事業の働きかけにより促進・改善されたと評価できるかが不透明であるため） 各ネットワークに訪問やイベント開催の提案等の働きかけを行っているが、働きかけをきっかけとして子ども若者支援をテーマとしたイベント等の開催が行われたネットワーク、未だ具体的な活動にはつながっていないネットワークとに分かれている。また、新たに就労支援を目的としたネットワーク活動が始まった。</p>
<p>千葉県内の子ども・若者や支援者が必要な情報を得ることができている</p>	<p>子ども・若者の支援情報の認知度 支援者の支援情報の認知度</p>	<p>30% 80%</p>	<p>2024年1月</p>	<p>件数測定不能（現時点で客観的な認知度調査未実施のため） 件数測定不能（現時点で客観的な認知度調査未実施のため、ただし、事業に関する問い合わせも増えており事業開始時から認知度が広がりを感じている） 子ども・若者や支援者に対する啓発イベントの開催、情報発信サイト構築を進めることで、子ども・若者に関わる支援者間での課題意識の高まりがみられる。</p>
<p>子ども・若者のアドボカシーが推進される</p>	<p>子ども・若者が参画する会議やイベント等の数 子ども若者の声に基づいた政策提言を行政へ行った数</p>	<p>20件 2件</p>	<p>2024年1月</p>	<p>2件 0件 子ども・若者が参加、あるいはアドボカシー推進したイベントとして児童相談所でアフターケアに関する勉強会を開催する他、児童擁護施設で子ども・若者と職員が共に18歳成人について考える機会等を設ける等して、子ども・若者の声が支援者に届けられる機会が増え始めている。</p>



② アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」(※任意)

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察



事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
<p>事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には</p> <ul style="list-style-type: none"><li><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある</li><li><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある</li><li><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある</li><li><input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である</li><li><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は難しい</li></ul> <p>と自己評価する</p>	<p>コンソーシアム構成団体を中心に実施するアウトカムについては概ね予定通り実施できるのに対して、コンソーシアム構成団体外との連携・協働が中心となるアウトカムについては、新型コロナウイルス感染症への対応状況の違いやその他各団体固有の事情等に左右される部分があり、働きかけから具体的な活動に至るまでに時間を要する傾向にあり進行状況が芳しくない。</p> <p>達成の見込みが薄い短期アウトカムについては、いずれも新型コロナウイルスの感染拡大や各関係団体の固有の事情が進行状況に及ぼす影響が大きい。</p> <p>新型コロナウイルスの感染対策に伴う活動制限は全国的には緩和傾向にあり、従前のような対面行事等が再び行われやすくなってきていること、各関係団体固</p>

	<p>有の事情については相互理解を深めた上で、より各関係団体のニーズにあい最適化された形での活動を実施していくことで改善を目指していくことが期待できるため、今後はある程度改善が見込まれるものの、当初の目標が達成できるような形で短期間で劇的な改善の見通しは薄いため、現状では目標値の達成は不透明と評価せざるを得ない。残り1年半の中で目標値の見直しあるいは具体的な活動の見直しをしていく必要がある。</p>
--	---

## B) 事業の改善状況の評価

### ① 事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の 適切性	<p>・社会的養護の子ども・若者の支援を困難にさせている要因について仮説と実態との合致具合</p> <p>※事前評価段階でこの項目については一定の合致を得ているという評価に至っているが、事業を進める中で子ども若者の支援に携わる関係機関とのつながりを広げたことも踏まえて再度、評価を実施することとした。</p>	<p>・仮説と実態については概ね齟齬はない。</p>	<p>千葉県内の子ども若者支援に携わる児童養護施設や自立援助ホーム、中核地域生活支援センター、生活困窮者自立支援事業所、女性支援団体等を中心に実施したインタビューやアンケート結果により、子ども・若者に必要な情報が届いていないこと、子ども・若者に関する支援情報や支援実態が見えにくいということ、こうした溝を埋めていくために子ども・若者のニーズによりあわせた取組や顔の見える関係での取組の必要性が共通して指摘されており、子ども・若者を取り巻く課題や必要とされる支援（中期以上の居住支援や多様な困難を抱える若者に配慮した就労支援、児童期へのトラウマケア等）については概ね課題の要因や実態について概ね齟齬はないと評価できる。</p> <p>一方で各制度の実情や子ども若者支援のノウハウの理解の解像度についてはまばらな状態にありその限りでは齟齬もみられる。また、抽象的な課題理解の共有だけでは実践における具体的な連携・協働にまでは発展しにくい。そのため、これらの課題の要因や実態についてより具体的に言語化、発信、共有する機会や、関係団体がより具体的に共に活動する機会を設けて理解の解像度を高めていく必要がある。</p>

<p>・アウトプットは計画通りに産出されているか</p>	<p>・④⑤⑥のアウトプットについては計画の遅れがみられる。 そのため、アウトカムの見直し、あるいは計画の目標設定自体の見直しが必要である。</p>	<p>アウトプットのうちコンソーシアム構成団体を中心とした①、②、③の取組については計画通り進んでおり、また勉強会等を実施した関係機関からも好評を頂いており、達成の見込みはある。 一方でコンソーシアム外の団体への働きかけを中心とした④、⑤、⑥については、関係団体各々の事情に左右されやすく、自団体と異なり団体の内状等の理解も十分ではなく、そこに関与するような立場・権限もない中で、外部から直接的に働きかけられることにも自ずと限界があるため計画よりも遅れており、目標値自体の見直しが必要と感じられる。 ⑦については事業の柱のひとつである専用 WEB サイトのオープンが遅れている。⑧についても、実際に子ども・若者が参画した取組がなかなか実施できていない。</p>
<p>・短期アウトカムの達成の見込みはあるか</p>	<p>・②、④アウトカムについては現時点では達成の見込みが薄い。 そのため、活動内容の見直し、あるいは計画の目標設定自体の見直しが必要である。</p>	<p>①については各アウトプットが計画通り算出されておりアウトカム達成の見込みも高い。 ②についてはコンソーシアム外の事情に左右されやすいこと、また目標とする指標自体の妥当性に疑義が生じていることから現時点では達成の見込みは薄い。 ③については様々な手段により情報発信に努めており、徐々にその認知も広がっていることから達成の見込みは十分にある。 ④については予定していたよりも取組が他のアウトカムと比較して全般的に遅れており、取組を強化・改善していかないと達成の見込みは薄いといえる。</p>

<p>実施をとおした活動の改善、知見の共有</p>	<p>千葉県内の関係各機関における子ども若者支援に対する支援情報や課題構造の共通理解や取組状況が多様な関係者に共有され生かされているか</p>	<p>各種イベントや意見交換を通じて知見の共有が進んできている。</p>	<p>コンソーシアムが企画したイベント等を通じて県内の様々な場面でこれまで関わりのなかった機関、団体間での交流や連携事例が生まれ始めている。例えば、7月に実施した神奈川訪問企画を通じて、児童養護施設、自立援助ホーム、NPO等多様な関係者の参加と交流の機会につながり、アンケートでも各参加者にとって様々な面で学びや刺激となったことが伺えた。</p> <p>コンソーシアム関係団体からのアンケートやインタビュー結果、外部評価委員の評価により連携を促進していく上で実際に集まり共同作業を行うこと、答えのない問いについて心理的安全性が担保された中で語らう時間を創出すること等が有用であることが確認されたため、今後ますますこうした取組を促進した活動の充実が必要と考える。</p>
<p>組織基盤強化・環境整備</p>	<p>千葉県内の関係各機関に対してコンソーシアムの取組目的の認知や協力体制の充実具合、及び主体性の程度</p>	<p>県内の関係団体等と共催したイベント等の諸活動が企画されるようになっている。</p>	<p>コンソーシアムの取組の認知が広がり、関心を持つ団体等が増えてきている。今年度は県内の児童養護施設や児童家庭支援センター、児童養護施設からそれぞれ研修や勉強会の開催依頼を頂く機会が増え、現在も依頼が立て続いている状況にある。</p> <p>関係各団体に対して地道に発信や訪問等による対話の機会を重ねてきたことで、コンソーシアムの取組の意義への理解や信頼が徐々に得られるようになってきた成果と評価でき、今後も同様の方針で地道に活動を継続していくことが有用と考える。</p>

<p>・助成終了後も各ネットワークが継続的に活動するために主体的にネットワークの維持、活性化をする風土ができあがっているか</p>	<p>子ども若者支援のためのつながりを作っていくことが重要という認識が関係機関の中で徐々に醸成されてきている。</p>	<p>取組を進めていく中で単にネットワーク内での会議開催数や参加者数だけでなく、ネットワークを活性化させていくうえで肝となっている要素は何かを解き明かしていくことが重要ではないかという気づきを得た。そして、外部評価委員の助言から関係各機関の中で外の団体とのネットワークを広げようとする役割の支援者をどのように育成、サポートしていけるかが肝ではないかという指摘を得た。実際にある施設の職業指導員はコンソーシアムを通じて知り得た社会資源を用いて、自組織内への働きかけを行い職場改善等に向けた研修会を企画する等の事例がみられるようになった。</p> <p>ネットワークで知見を共有したうえで各ネットワーク参加者が自団体にその学びを持ち帰り団体内の取組等の改善に繋げることで、ネットワーク参加の意義についての団体内理解を高めると共に、またそうした実践例をネットワークに還元させていくような循環構造を促進していくことが重要であり、そうした観点から活動を展開していくことがより有用であると考ええる。</p>
---	---	---

#### ① 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

・アフターケアに関して先進的な取組をしている神奈川県への訪問をしたことで、千葉県内の関係各機関の支援者の学び、刺激となり、地な県内で取組をすすめていく上での課題、改善点の明確化や具体的なアクションプランの提案につながっている。

・中核センターと施設、CANS との連携モデルの取り組みを進めていくうえで肝となる児童相談所との意見交換を重ねる中で、連携を支える児童相談所の若手職員の人材育成や地域の関係機関との顔の見える関係づくりが急務であることが明らかになったため、児童相談所と地域の相談支援機関合同の勉強会を実施するようになった。結果、勉強会に参加した児童相談所の若手職員や関係機関からは好評を頂いている他、日々の業務への改善傾向も伺えるようになっている。

・若者支援をしていく中でひとつの重要テーマである就労支援を内容としたネットワーク勉強会の実施をした。それまでのアフターケアをテーマにした勉強会とは異なる若者の就労支援に関心を持つ機関、団体や民間企業からも大きな反響を呼び、従来とは異なる支援者層の開

拓、つながりを深める結果につながった。

## ② 事前評価時には想定していなかった成果

・当初は想定していなかったところでの課題(子ども・若者に関する支援者が互いの制度や実態についてあまりよく理解していないこと、各支援領域毎に様々な要因からネットワークを広げていくうえでの課題があること、そうしたネットワークを広げようとする支援者を育成・サポートしていくことが重要であること、子ども若者支援を専門に行なっていない機関からは子ども若者支援への苦手意識が強いこと、子ども若者支援を専門に行なっている機関では支援を内に抱え込もうとする傾向が強いこと 等)の発見

・子ども・若者と協働して取組を進めることにより、支援者中心で議論をしているだけでは考えすら及ばなかったような若者独自の困り感(例えば支援者が良かれと思って用意した支援の選択肢がかえって若者にとっては混乱を与えてしまう等)への気づき



## ③ 事業計画の改善の必要性の確認

- 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇒アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている





事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
<p>残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために</p> <p><input type="checkbox"/> 事業計画は適切に改善されたといえる</p> <p><input type="checkbox"/> 事業計画を適切に改善する見込みがある</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 事業計画の改善について、課題が残っている</p> <p>と自己評価する</p>	<p>コンソーシアム関係団体や関係機関からのヒアリングを経る中で、子ども若者支援については関係機関の相互理解や現代の子ども・若者の実情の理解等様々な点で課題が山積しており、これらの課題を一挙に解決して持続的かつ実効性あるネットワークの構築や子ども・若者の当事者参画を実現していくにはより年月が必要とみられる。</p> <p>そのためこうした課題自体をより分析的に整理したうえで目標達成のために効果的な活動を再考するとともに事業計画終了時点でのアウトカムの指標を下方修正あるいは、評価軸自体を見直していく必要があると考える。</p>

④ 中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

・連携・協働を進めていくうえで各機関、団体、領域毎にネットワーク構築のために動く支援者の育成やサポートがより重要。そうした立場の支援者に必要なスキル、直面しやすい課題、課題解決のための方策について分析したうえで、育成やサポートに特化した形での研修会や調査研究を実施していく。

・子ども・若者支援に関する課題構造について関係する支援者間での相互理解の解像度をより高めていくとともに、各関係団体毎の固有の事情の違いにも配慮した形で地域毎のニーズや課題、傾向の違いについても明確にしていき、それを改善していくための方策を探るための調査研究を実施していく。

・これまで地域の各団体の主体性を重視したボトムアップの取組を基本としてきたが、事業の残期間との兼ね合いを考慮して、ある程度トップダウンの取組、あるいは既に県内で活発な活動を行っている団体と連携・協働した取組を実施していく。具体的には、これまでの各種ヒアリング等の中でも特にニーズの高かった身寄りのない若者の居住支援、特に中期的なつなぎのためのステップハウスを社会資源として創出したうえで、子ども・若者支援機関とそれ以外の支援機関とが具体的な支援を通じて交わる仕組を設ける。

・子ども・若者、そして支援者が実際に対面で集まり意見を交わすことができるような安心安全な場を子若ネットワークの拠点として設ける。そして支援者だけではなく、子ども・若者を交えた共創体験を通じて具体的な連携活動やアドボカシーの推進につなげていく。

添付資料

活動の写真（画像データは1枚2MG以下、3～4枚程度）